

2013年5月

●REPA 現地視察・霜里農場 福島県伊達市から 47 名が参加

(2013年5月29日(土))

福島県伊達市在住者及び REPA 会員による霜里農場視察(埼玉県小川町)が5月29日行われました。当日はあいにくの雨模様でしたが、伊達市小国地区及び梁川地区から47名、REPA 会員9名の総勢56名が参加し、また、東日本大震災からの復興を継続的に追跡取材している復興支援メディア隊のスタッフ2名が同行取材しました。

本企画は、REPAが伊達市小国地区で展開している霊山プロジェクトの一環として実施されたもので、福島第一原発事故後、2年余が経過し地域再生が大きなテーマとなってきた中で、霜里農場が取り組んでいる「自給・自立のための有機農業」を学ぼうというもの。霜里農場の金子美登代表は、被災者の方々のこうした要望を快く受け入れ、特別に視察日を設定していただきました。



金子氏の話は実に多岐にわたるもので、しかも有機農業ならではの特徴を詳細にわかり懇切丁寧に説明していただきました。以下はその概略です。

- ①廃食用油を加工してトラクターや車の燃料、電気や風呂沸かしに活用している SVO プロジェクト
- ②チェーンで除草する有機水栽培の効果(2回代掻き+米ぬか除草+田植え後1週間でチェーン除草)
- ③家畜糞尿や生ごみを活用しエネルギーとして、また発酵残渣液を液肥として利用していること
- ④薪をウッドボイラで給油や床暖房に、燃えた灰を上質なミネラルとカリ肥料として利用していること
- ⑤自然の生態系(植物や野菜、小動物や昆虫の相性等)を活用した野菜栽培面での工夫
- ⑥周辺に棲息する小動物からの栽培野菜等の保護
- ⑦有機農業を地域に受け入れてもらうまでのご苦労
- ⑧理解ある消費者/地域との協働

⑨世界各地からの研修生の受入れ(40カ国から100名以上)

金子氏はそうしたお話を通じ、「有機農業は耕す土の文化を基本にした農村文化の土台を形成し、まちと村のコミュニティを復権し、生物多様性の保全することになる。住民が誇りと生きがいをベースにした地域活性化(「内発的発展のまちづくり」)が図れる」という趣旨の哲学的、芸術的ともいえる考えを随所に盛り込まれており、今後の被災地の再生を考えていく上で、大変示唆に富むものでした。そして、「こうした地域の人々の営みが、森林や里山を再生し美しい村づくりになっている」「3.11以降、食とエネルギーの自給が重要になっているが、有機農業はそうした事態になった時でも一時的ではあっても自給を可能とする」という趣旨の話で結ばれています。時間の都合で、水稻栽培の現地視察ができなかったのは残念でした。しかし、これまで有機農業にはあまり縁のなかった伊達市からの参加者は、写真やメモをとり、質問したり、あるいは直接手で野菜や土に触れたり、口に入れてみたり、熱心に視察されていたのがとても印象的でした。6月末には住民の方々による地域再生について議論する集会が予定されており、これらの成果がどのような形に結実するのか楽しみです。いずれにしても収穫の多い、現地視察であったと思います。あらためて紙上を通じ、金子美登氏に感謝いたしたいと思います。(篠田淳司)

●講演 2013NEW 環境展(2013年5月24日)

東京ビッグサイトで開催された 2013NEW 環境展で「Biogas その事業化と問題点 ～バイオガス先進国・ドイツとの比較～」について今泉理事が講演をおこないました。

●水田除染活動(2013年5月21日～5月22日)

これまで竹炭効果の定量的なデータが十分ではありませんでした。そこで今回と次回に掛けて、基礎試験を進めております。竹炭を粉碎し篩分けし、これとゼオライト、ケイ酸カリ散布前の土壌と代かき水を10リットルの容器で攪拌し竹炭の吸着効果を確認します。サンプルをいくつか作りました。次回は詳細計測の予定です。



竹炭効果基礎試験サンプル

左が基準サンプル(竹炭無し)、右が竹炭含入サンプル



一日放置後の基準サンプル

快晴の下、PJメンバー全員で地元のメンバーのご指導を戴きながら、試験水田8区画の田植えを行いました。ほとんどのメンバーは初体験で、お米の大切さを改めて認識しました。終了後、早苗饗(サナブリ)という田植を終えたお祝いと、今年の豊作を祈念しました。



田植え前に早苗の手入れ



皆で田植え、右が指導戴いた大波氏



田植えの途中で一休み。復興支援メディア隊の小松さんも取材にられました。



田植えを終わっ記念写真。良い思い出です



早苗饗(サナブリ)という田植えを終えたお祝い



貴重な竹炭試験サンプル